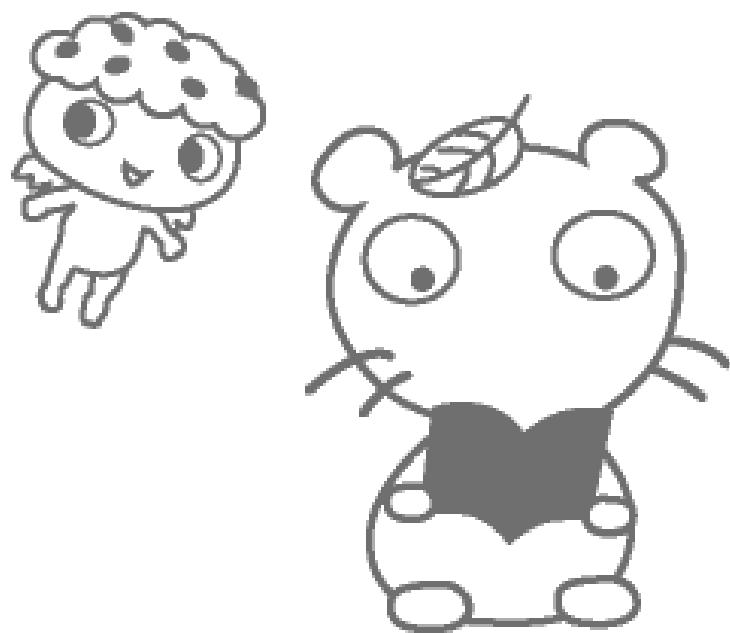


第十七回 小中学生

ふるさとの詩

入賞作品集



羽生市

第十七回 小中学生「ふるさとの詩」

入賞作品集 目次

◎ 小学生の部（五十音順）

太田玉茗賞	「たい」をかなえるその日まで	関根 倆	羽生南小学校	六年	1
宮澤章一賞	ばあちゃんが入院したとき	関根 琉聖	新郷第一小学校	六年	
優秀賞	夕方に	関根 謙真	新郷第一小学校	六年	
	ヤモリ食堂へようこそ	西野 嘉人	三田ヶ谷小学校	六年	
	ザリガニとぼく	渡邊 正真	新郷第一小学校	二年	
奨励賞	山の一番上のベンチ	齊藤 輝真	手子林小学校	三年	
	ひいおばあちゃんからのおくりもの	澤田 百葉	須影小学校	二年	
	わたしの好きなこと	鈴木 柚菜	新郷第一小学校	三年	
	わが家は公園	高鳥 麗空	手子林小学校	三年	
	トマトとからあげ	中島 理希	新郷第一小学校	二年	

その他の良い作品

◎ 中学生の部（五十音順）

太田玉茗賞 大好きな音に包まれて

宮澤章二賞 書の道を

優秀賞 また会いたいなあ

「言葉」の力

夏の思い出

奨励賞 心にひびく音

肅々と懸命に

田んぼと鳥と私
私を乗せて

福田

孝喜

福田

彩陽

小菅

統司

倉橋

樹弘

遠藤

準人

春山

夏実

根岸

燦樹

大谷

蓮

岡崎

匠音

鈴木

琴子

南中学校

東中学校

岡崎

匠音

西中学校

西中学校

南中学校

西中学校

西中学校

南中学校

東中学校

西中学校

東中学校

西中学校

東中学校

西中学校

東中学校

南中学校

南中学校

二年

二年

二年

三年

二年

二年

三年

二年

一年

一年

一年

◎小学生の部

太田玉茗賞

「たい」をかなえるその日まで

羽生南小学校 六年

関根 倭

海に行きたい

川にも 山にも行きたい

高い山にも登つてみたい

深海にももぐつてみたい

空を飛んでみたい

宇宙にも行つてみたい

たくさんのすばらしい景色を見てみたい

世界中の人々と話をしてみたい

色々な動物にも出会つてみたい

見たこともないような

植物も発見してみたい

毎日笑つて過ごしたい

ぼくの中には

「してみ　たい」
「やつてみ　たい」

たくさんの「たい」が育つていて
希望と　夢で　胸をパンパンにふくらませ

高く　遠くへ　飛べるように
知識の引き出しを　たくさん増やして

自分も　まわりのみんなも

幸せの笑顔で　つつめるように

目の前に広がる

「たい」のドアを

一つでも多く　ひらけるように

「たい」を　かなえる　その日のために

ぼくは進んで行くんだ

宮澤章二賞

ばあちゃんが入院したとき

新郷第一小学校 六年

関根 瑞聖

ばあちゃんが救急車で運ばれた
庭の木を切つている時
転んで足の骨を折つてしまつたそうだ
はく息が まつ白になるころの事

母さんから聞いた話
退院した日 足の悪いじいちゃんは
げん関まで ばあちゃんをむかえに出て
二人で手をにぎつて 泣いていたつて
庭のバラが散つたころの事

重い物を持てないばあちゃんの手伝いで
一緒に買い物に行つた

つえをついて足をひきずりながら ゆっくり
歩くばあちゃんは 僕より小さくなつていた
その日は みんなでたくさん笑つた
家の中が明るく見えた

「またおいでね！」

げん関で並んで手をふる二人は
同じ顔で笑つていた

「二人で一人なんだな…」

げん関で手をふるじいちゃんは
笑つているのに なんだかさびしそうだつた

僕達が家でご飯を食べている時
みんなで笑つて いる時 ふと思う
「じいちゃん 今何して いるかな」

くしゃみがとび出して 桜が散つたころの事

優秀賞

夕方に

新郷第一小学校

六年

関根 諒真

ガツタン、ガツタン
ガタ、ガツタン

新郷駅に電車来て、
カンカン踏切、鳴りはじめ

ガツタン、ガツタン
ガタ、ガツタン

反対側にも電車来て、
ゆつくり踏切しまつてく

単線電車の秩父線
ここで電車がすれ違う

きいきいきいきい、鳴りながら

電車はゆつくり止まつてく
がらがらがーと、ドアひらき、
乗客がみな、降りてくる

カンカンカンカン、踏切は、
出発までは、とおせんぼ
ぶーっと電車は警笛を
鳴らしてゆつくり走り出す
カンカン鳴つてた踏切は
ぐぐつとバーが上がつてく

夕暮れ時の新郷駅
人も電車もすれ違う

ガツタン、ガツタン
ガタ、ガツタン

明日も、電車はすれ違う
みんなを乗せて、走り出す

ヤモリ食堂へようこそ

三田ヶ谷小学校 六年

西野 嘉人

ぼくの家族は 父 母 ぼく 弟の四人だ
しかし 夏になると家族が増える

台所の窓にヤモリ一家が住み込む
夏になるとぼくの家は家族四人とヤモリ一家
の二世帯住宅になる

子ヤモリが生まれて ヤモリ一家に家族が増え
えた
子ヤモリの名前は 「チビ」

ヤモリ一家は 台所の窓でぼくたちと一緒に
食事をしている

電気をつけた台所に集まつた虫を食べている
母は「電気代が・・・。」と言いながら

電気を付けてヤモリ食堂を営業している

チビは最初ヤモリ食堂で食事ができなかつた

虫の捕まえ方がわからなかつたからだ
チビは何日も何時間も練習をしていた

何度も 虫を追いかけて逃げられた
やつとガを捕まえた

食べ方がわからない

ガをくわえたまま困つていた

父ヤモリが教えているようだつた
ついに チビはガを食べた

家族みんなで チビに拍手した

夏後半になり 父ヤモリと母ヤモリがいなく
なつた

チビだけヤモリ食堂に来る

母はヤモリ食堂を営業してくれている
チビもヤモリ食堂の常連になつた

来年はチビがヤモリ食堂に新しい常連客を連
れてきてくれると思う

来年もヤモリ食堂を営業予定だ
「ヤモリ食堂にいらつしやいませ。」

ザリガニとぼく

新郷第一小学校 二年

渡邊 正真

ごはんをこつそりたべる。
はずかしがりやのザリ男。
ぼくとそつくりだね。

生かつのじかんに

生きものさがしに行つた。

学校のまわりには

よう水ろや田んぼがたくさんある。

ザリガニを見つけた。

クラスで一ばんさいしょに見つけた。
にごつた水でよく見えなかつたけど、

ブクブクブクブク

ザリガニからヒントをもらつて、
シユツとあみですくつた。

こんにちは。

はじめて見た本ものは、
ちや色くて、小さくて、
ひげが長かつた。

きみの名前は、ザリ男。

奨励賞

山の一番上のベンチ

手子林小学校 三年

齊藤 輝真

ぼくは山の公園が大すきだ
いつも自てん車にとびのり
めちやこぎで向かう

公園につくと

かならず山の一番上のベンチへすわる
そこから電車が見える

ぼくが手をふると

ファンファンとおへんじをしてくる

ぼくはうれしくて

さらに大きく手をふり返す

次の電車またこないかなあ

すると

ふわふわつと風がふいた

ぼくのあせがいつしゅんひいた気がした
田や畑からの風かな

やさしい風で気持ちがいい
風は電車をおいかけていったのかな
風さんおいついたかな

またあいたいな

大すきな山の公園でまつているよ

ひいおばあちゃんからの おくりもの

須影小学校 二年

澤田 百葉

はるになると

花のつぼみのようなめが土からかおを出す

こ年も会えたね

元気に大きくなつてね

ははは、うれしそうだ

水をあげてひりようもあげる

たいようのひかりをあびてぐんぐんのびる
あれ?!小さな虫がたくさんついている

アブラ虫だ!!

まほうのくすりでたいじする

こんどは、しちゅうだ

これで風のつよい日だつてだいじょうぶ

水をあげてひりようもあげる

たいようのひかりをあびて

ぐんぐんのびる

まほうのくすりでこの子をまもる

あつい夏がやつてきた

あつ!!みどりの小さなつぼみ
つぼみさん大きくなあれ大きくなあれ
水をあげてひりようもあげる
たいようのひかりをあびて
ふくらむふくらむ大きくなる
つぼみが白つぽくなつてきた
もうすぐだ・・・

あしたのあさにはもしかして
げんかんをあけるとあまーいかおり
わあーーーきれい

まつ白で大きな花

さいたよー

かぞくみんながあつまた
なんてきれいなんでしょう

一本きつてほとけさまにあげる

いつも見まもつてくれてありがとう
ひいおばあちゃんのたいせつにしていた花

カサブランカ

こ年もさいたよ

わたしの好きなこと

それが上手にかくくふう

新郷第一小学校 三年

鈴木 柚菜

かわいいイラストを見てかくのもすき
人の顔のひょうじょう
体の動き

わたしはイラストをかくのがすき
小さいころからかいていた

女の子

男の子

動物

フルーツ

思いつくままに

ノートにたくさんかいた

女の子をかくときは

目の中をきらきらさせる

はなは小さく

口はにつこりさせる

かみの毛は顔にあわせてかえる

動物をかくときは

目をはなしてかく

フルーツをかくときは

おいしく見えるように丸くかく

洋服のかきかた

たくさんべんきょうになる

イラストをかいていると

頭の中で物語ができる

空をとぶイラストをかいていると

わたしも空をとんでいる

お花のイラストをかいていると

わたしもお花畠にいる

空想の中で

わたしもいろいろなことができる

もつとイラストのことを

べんきょうしたいな

動物をかくときは

目をはなしてかく

フルーツをかくときは

おいしく見えるように丸くかく

わが家は公園

手子林小学校 三年

高鳥 麗空

わたしのお家のおにわには、

たくさんのお友だちが遊びに来る。

みんな、ブランコがお気に入り。

すな場に、ブランコ。

鉄ぼうに、すべり台。

家のうらには、大きなバスケットゴール。

これらは、わたしのおじいちゃんが

木などを買つてきて、

トントントン、ギコギコギコ。

一からつくつてくれたもの。

お姉ちゃん、わたし、弟の事を思つて

心をこめてつくつてくれた遊具たち。

すな場は、とても陽があたるから

大きな屋根までつけてくれた。

これですすしくすな遊び。

夏にはすべり台の下に

大きなビニールプールをおいて

上からシャワーでジャースと水をながせば、

わが家とくせいのウォータースライダー。

わたしのお家には、

たくさんのお友だちが遊びに来る。
みんな、ブランコがお気に入り。

そよ風にふかれて、ゆらゆらゆら。
わたしも手作りブランコが大すき。

そこでみんなが言う。

「公園みたいでいいなあ。」

「うらやましいなあ。」

そう言つてもらえると、

おじいちゃんもニッコリよろこぶ。

わたしもうれしい。

なんでもつくつてしまう、

おじいちゃんもニッコリよろこぶ。

わたしの自まんのおじいちゃん。

そんなおじいちゃんが、わたしは大すき。

トマトとからあげ

新郷第一小学校 二年

中島 理希

モミモミしているところを。
ぼくは思った。

きつとあのモミモミに
まほうがかかつているんだな。

「たん生日は、なにたべたい。」

おかあさんが聞いてくる。

ぼくのこたえはきまつてている。

「トマトとからあげ。」

だから、
とくべつな日には
ぜつたい
おかあさんのからあげじやなきや
ダメなんだ。

おかあさんと

大すきなトマトを買いに行く。

まつ赤なトマトをえらぶんだ。

「トマトとからあげ」

ぼくのサイコーのぜいたくなんだ。

でもね、からあげは

うつているものじやダメなんだ。

おかあさんのからあげじやなきや

ダメなんだ。

ぼくは見た。

ある日、おかあさんが、
ビニールぶくろにお肉を入れて、
ちようみりようを入れて、

その他の良い作品

作品は羽生市ホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
サイクリング	新郷第二小学校 三年	新井 煌叶
つながつたいのちのバトン	羽生北小学校 二年	石田 心花
あめのひ	新郷第一小学校 一年	石橋 侑芽
ナイトツアーアー	三田ヶ谷小学校 六年	木村 悠聖
わが家の庭で宝さがし	須影小学校 四年	澤田 乙葉
お父さんの仕事	羽生南小学校 三年	富田 芽吹
おばあちゃんのすいか	三田ヶ谷小学校 四年	野中 遥斗
心の中には いつまでもいるよ	新郷第一小学校 四年	平塚 大斗
あさがお	新郷第一小学校 一年	吉江 心
ぼくのやさしいおじいちゃん	手子林小学校 六年	渡部 涼平

◎中学生の部

基本打ち
技の練習

地稽古

太田玉茗賞 大好きな音に包まれて

南中学校 一年

岡崎 匠音

パンパンパン

木々の中にこだまする竹刀の音

ドンとひびくふみこむ足音

やー、一本を取りに行く気力のこもつた声

大好きな音たちが響き渡る

これからだ

自分を信じて進んでいこう

強くなつた自分を思い描いて

稽古にはげむ

一本のために

偉大な剣士に追いつくために

神聖な道場へ稽古に向かう
名だたる剣士が生まれ育つた町 羽生

默想

「神前に礼」

「先生方に礼」

「お互に礼」

礼に始まり礼に終わる

先生方の胸を借りて今日も稽古が始まつた

挑んでも挑んでも一本にとどかない
でも負けたくない

強くなりたい

大好きな音たちが僕を包み込む

僕も負けずに音（声）を出す

まだまだ まだまだ とどかない

宮澤章二賞

書の道を

東中学校 三年

鈴木 琴子

冷房の効いた部屋と

私の背丈ほどもある真っ白な和紙

硯からあふれんばかりの真っ黒な墨

筆を沈め
穂先を整え

息を吸い そして 吐く

紙へ筆を下ろす

「紙の上を滑るよう」

「全身を使つて」

「意志のある線を書く」

何度言われたかわからない言葉たちと

私の考えが頭の中で

いっぱいになつてぶつかる

最後は自分の感覚にまかせ
また筆を滑らせる

小学一年生から参加してきた
夏の書道コンクール

夏休みはずつと

部屋に墨の匂いがしている

筆を選び 墨を選び 紙を選び

新たな部門にも挑戦した

去年より上へ 上へと

走り続けた

賞を獲る作品はどれも

圧倒される 胸を打つものばかり

それは中学生でも小学一年生でも同じ
悔しいときも嬉しいときもあつた

でも 今年が最後

羽生出身の書家 三村秀竹先生

その流れを汲む私

それは誇りであり 責任のようなもの

生まれ育つたここ羽生から

埼玉一を いや

日本一を目指に

何百枚に一枚のその「一枚」へと

走り続ける

優秀賞

また会いたいなあ

西中学校 一年

大谷 蓮

今年の夏、初めて“ひいばあ”を迎えて行けた。

迎えに行けたとは、お盆様として。

僕はいつも野球をやっているので迎えに行けたことがない。

たまたま雨で練習がなかつたから行けた。車で迎えに行く道中、急に沢山の記憶がよみがえってきた。

もう3年も経っているのに、つい昨日の事のように。

ひいばあの口グセは
「ほつかあ。」

そうか。の意味らしいが僕はこれが大好きだつた。

「きまじいなあ。」

おりこうさんの意味らしいが人にはあまり通じない。
でも僕はこれを言わるのが一番の好物だつた。

つた。

頭をなでてくれるあの手も独特な方言を言うあの声ももう聞こえない。

たまに、ものまねして言つてみる。
家族に懐かしいと笑われる。

急に僕は悲しくなる。

いないことに慣れてきたはずなのに、思い出しては悲しみがよみがえる。

でも僕は、ひいばあと過ごした12年を一生忘れない。

あまりひいばとの記憶がない弟にその方言を使つてあげる。

僕が大好きだつたひいばとの思い出を繋いでいく。

「言葉」の力

東中学校 三年

根岸 燦樹

生きている

何度踏まれても 何度ちぎられても
強く根をはり

やさしく季節を 知らせてくれる
幸せだけ 人間にもたらしてくれる

幸せも不幸も

つくるのはいつも 「言葉」 だ

温かい 明るい未来につなげるため
大切に 「言葉」 を使おう

「言葉」 を幸せの扉を開く

鍵にしよう

強く 美しく たくましく

生きよう

花や木のように…。

人をたくさん傷つけてきた

人種差別をした

悪口を書き込んだ

不幸をつくるのは

いつも 「言葉」 だ

花や木たちは

「言葉」 で感情を伝えられない

けれど

強く 美しく たくましく

夏の思い出

化を始めた

そしたら、逆さまになつた

大丈夫かな!?

西中学校 二年

春山 夏実

透明なうすいエメラルドグリーン

初めて見たとき、感動したせみの羽化

夏休みになると祖父母の家に泊まりにいった

せみの羽化を見るのが楽しみだつた

夕食後、祖父と懐中電気を持って桜の木の下

へ行つた

「今日もせみの幼虫いるかな」

大きな祖父母の家にある桜の木の下で探した

幼虫はトコトコと歩いていた

せみは土から地上に出て木を登つていく

これから羽化が始まる

ドキドキ、ワクワクしながら待つた

そうやつて待つているとせみの幼虫の背中が

割れた

きらきらしていて力強い目をしていた

ゆづくりゆづくり時間をかけて羽化をするせみ

ドキドキの瞬間が大きくたくさんあつた

きれいなエメラルドグリーンをしたせみが羽

逆さまになつてどんどん時間が過ぎていく
だんだん心配になつてきた
でも、ゆっくりと起き上がりつて今度は羽根を
広げていつた

本当に神秘的な瞬間だつた

そして、ついに成虫になつて羽根の色がだん
だんと変わつていつた

桜の木の下で七年も過ごすせみ

地上に出てからは一週間しか生きられないせみ
このせみのおかげで大切な夏の思い出がまた
一つ増えた

奨励賞

心にひびく音

東中学校 二年

遠藤 準人

「ヤアー！」
「イヤアー！」

「怖がるな！」
仲間の声、心臓の音。
よし、やるぞ！
「始め。」

はだをじわじわ焼く空気。

ほおに伝わる汗をほつといて

僕の目は、今まさに戦っている。

先輩の、竹刀の動きを追うのに必死だ。

力チーン、力チカチ、パチン、ビタン…。

辺りはシーンとしずまりかえって

いつもはうるさいセミの鳴き声も

いまだけは聞こえない。

力チーン、力チ、力チ、力チカチ

バコーン！

「メーン！」

目がさめるような音が、体育館にひびいた。

初めて出させてもらえる練習試合。
「まっすぐ打つていけよ。」

ドクン、ドクン…。

からっぽになつた心が
新たな思いで満たされていく。
僕は力いっぱい声を出した。

「メーン！」

僕の心の中のものが
あふれて、はじけていった。

今度は音だけじゃなく、肌で感じる。

竹刀の重み、力強さ。

相手の面に手をのばす。

力チーン、力チ、バチン

バッコーン！

肃々と懸命に

西中学校 三年

倉橋 樹弘

僕は走れるどこまでも
　　肃々と懸命に
今日も走るどこまでも
　　タン、タン、
　　タン、タン…：

僕は走るどこまでも

帽子を被り、靴紐を優しく結ぶ
時計に指を当て、スタートを待つ
僕は走るどこまでも

タン、タン、タン、タン

熱い地面を踏み締める足音
痺れるほどに照りつける日差し

今日も走るどこまでも

今年の夏、不安と希望を抱えて入った駅伝部。
新しい自分を見つけるため、目の前のチャンスに一歩を踏み入れた。

肃々と練習をし続ける

足を止めず懸命に走る

体の調子

空気のにおい

雨の音や鳥の声

全てのものが僕の背中を押してくれている
ゴールを決めて走り出した今

田んぼと鳥と私

東中学校 二年

小菅 統司

田んぼの緑と白

白い大きな飛行体は本当にびつくりする
力モやキジとは比べ物にならない
大きさとスピード

五月に植えた稻は

七月には腰の高さまで育つ
緑の田んぼが完成する頃には
そこから飛び出してくる鳥に
びつくりさせられることが増える

びつくり初級は力モ

力モの親子が田んぼを泳ぎ終わつて
急に道に飛び出してくる
マイペースにちよこちよこ歩いて

びつくり中級はキジ

鳥がでてきたことはすぐわかる
でも赤いとさかの鳥に
私は一瞬混乱する

びつくり上級はシラサギ
緑色の田んぼから

そして大空の青と白
すがすがしいほど

色あざやかに心をうばわれる
僕もいつか大空を自由に
飛んでみたい
こんな気持ちになれる日々が続くことを
心から願っている

私を乗せて

南中学校 二年

福田 彩陽

羽生駅始発 ○○行き

気持ちの良い風が入つてくる
田んぼの匂いが鼻をくすぐる
線路を走る音と心地よい揺れ

羽生駅始発 三峰口行き

レトロなところ

少し年期の入つた車両
優しい発車メロディー

大好きな秩父鉄道

私はどんな道に進むのか
曲がつたり 停車したり
きっと真っ直ぐではない

羽生駅始発 未来行き

私の未来は羽生から出発する
未来への希望を乗せ出発する
秩父鉄道のようにどつしりと
人生の線路を走つて行きたい

熊谷駅までの20分
塾の勉強をしたり
時に居眠りしたり
小学生の私も
中学生の私も
心躍る日も 沈む日も

どんな私も乗せて走つてくれる
私の成長を見守つてくれている
そんな気持ちになつてくる

父と歩く

西中学校 二年

福田 孝喜

僕は父とウォーキングをしている。

去年の秋から始め、四季折々を感じてきた。秋はいとうの絨毯が夕日に照らされ、琥珀色に光つた。

冬は手袋をつけて歩いていても手足がかじかんで痺れるようだ。

そんな時、懐中電灯の光が寒さを和らげた。春は風が吹くたびに桜の花びらが舞い落ちて地面は薄桜色に染まつた。

梅雨は遠雷の中、父はいつも通り歩き僕は少し怖がりながら付いて行つた。

突然の大雨で雨宿りしたこともある。

グレーの空が僅か十数分で白く煙のような空になり不思議だと感じた。

夏は厳しい暑さに耐えながら歩いた。

時にはセミが頭をかすめたり、目の前をヘビが横切つたり、頭上にコウモリの群れが飛んでいたこともある。

利根川の土手に登ると、ただの風でも体が透けるような、吹き飛ぶような感覚になる。
ここで飲む麦茶は格別だ。

一面に広がる緑の奥に街や山々が連なる。

大河に影をつくる橋梁は列車が通ると不規則な連符を奏てる。

遊歩道はジョギングの人、犬の散歩をする人などが行き交う。

階段を下ると、自然豊かな公園がある。

ここが自分の癒しのスポットだ。

父と歩くこともなかなかできなくなるだろう。

限りある時間でこの街のことをもつと知つていきたい。

それが今後の支えになるんじゃないのか、そんなことを感じながら今日も父と歩く。

その他の良い作品

作品は羽生市ホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
僕の新しき通学路	東中学校 一年	岩崎 朱里
稻のように	東中学校 三年	関根 杏華
こんなところがあつたんだ	西中学校 二年	中山 美空
道	東中学校 一年	西澤 雪菜
思いをつなぐ	西中学校 二年	春山 良太
夏の色	東中学校 三年	宝藏寺 杏菜
僕たちの利根川	東中学校 一年	細井 大暉
思いをメロディーに	西中学校 一年	森田 有紀
成長	東中学校 一年	吉田 直哉
変わらないもの	東中学校 二年	山下 蒼太

第十七回 小中学生「ふるさとの詩」募集要項

利根川の流れに育まれ、四季おりおりの美しい自然に恵まれた羽生市は、日本の近代詩史に名をとどめた、太田玉茗を生んだまちであり、田山花袋の小説『田舎教師』のふるさとのまちです。

また、羽生市出身の宮澤章二は、市内の多くの校歌を作詞した詩人です。

この二人を郷土の偉人として尊敬し、顕彰するためにも、みなさんの「ふるさと」を一篇の詩にして、応募してみませんか。

● 募集作品

- ・ 「ふるさと」を題材とした作品、または自由題
(家族、友だち、自然、伝統行事など、心に感じたことを書いてください。)
- ・ 自作で未発表の作品(過去に書いた作品でも構いません。)
- ・ 応募作品数は一人1篇

● 応募方法

- ・ 400字詰め原稿用紙B4縦書、表題・氏名・本文で2枚以内の作品。
- ・ 各学校で取りまとめ、名簿を添付のうえ提出をお願いします。

● 応募資格

- ・ 市内の小学生・中学生

● 応募締切

- ・ 令和3年9月3日(金)



● 発表

- ・ 令和3年11月下旬に通知

● 賞

- ・ 小学生の部・中学生の部
各部門とも、太田玉茗賞 1篇、宮澤章二賞 1篇、優秀賞 3篇、奨励賞 5篇
- ・ 賞状と盾を贈呈します。

● その他

- ・ 応募作品の著作権は主催者に帰属し、作品は返却しません。
- ・ 入賞者の作品・氏名・学校名・学年については、広報及びホームページに掲載するほか、報道機関等に公表します。
- ・ ホームページには、過去の作品も掲載されておりますので、参考としてご覧ください。

● 主催 羽生市

● 応募・問合せ先

羽生市役所秘書広報課 〒348-8601 羽生市東6-15 Tel. 561-1121(内線204)

●第十七回 小中学生「ふるさとの詩」募集結果

小学生の部	8 6 6 篇
中学生の部	9 3 2 篇
応募総数	1,798 篇

●選考委員（五十音順）

塩田禎子

ダイヤモンド 真紀子

根岸光子

萩原澄江

水野栄子

発行者 羽生市総務部秘書広報課

発行日 令和4年1月24日

